



もう須賀敦子が船に乗ってヨーロッパを目指した時代とはすっかり様変わりして、日本人の女の子がバックパックひとつで世界中のあちこちをうろうろ旅をしている時代だということになっているので、旅に出たらさぞかしそこらじゅうで自分と同じような旅行者に会うことになるのだろうという、現代の多くの旅行者が失望めいた思いをするのであろう事態を、わたしたちはあらかじめ想定しておいて、そのがっかり度をいくらか緩和しようとするということはあるかもしれない。

しかしながら、その旅に出て、まず最初に降り立ったフランクフルト・マイン国際空港で、日本人の女の子のバックパッカーはおろか、日本人の姿すらほとんど見かけないことに、わたしは虚を衝かれた。

記憶にあるターミナルが妙に薄暗いのは、単に到着したのが現地時間の夜だったせいなのか、もともと照明も少ないそういう場所だったのか、わたしの心象風景としてそういうイメージとなって残っているのか、今となってはよく分からない。

自分と同じような旅行者で海外が溢れかえっていたら失望するので予防線まで張ってきたはずなのに、いざ、言葉も通じない場所に一人っきりになれば、今度は不安になる。

それほど旅慣れているわけでもないし、外国語が得意なわけでもなく、なにを根拠にきっと大丈夫だろうと、一ヶ月もあてもなく旅行ができると思って出発してきてしまったのだろうか。

旅につきもののトラブルを楽しんでやるという気概があるわけでもないし、できればどんな小さなトラブルにも、またどんな種類の厄災にも遭わないで、無傷のまま帰りたい。

出発したばかりだというのに、もう安全に帰ることだけが目的だという心境にいきつく。

そうなる、一体なにが楽しくてこんな外国の巨大な空港でひとり、立ちすくんでるのだろうかという気分にもなる。

ここでは乗り換えるだけで、本来の目的地はイタリアだから、ドイツ語の指差し会話だとかガイドブックだとかの用意はまるでないし、

ここが空港内のどこなのか、いや、空港自体がどのくらいの規模で、一体どんな全容をしているのかも見当がつかないでいた。

かなり巨大な空港だという気がしてうろついていたような気もするし、そんなことは帰ってきてからあとから植わった知識かもしれない。

いや、このことがあった。この雑文を書くまでずっと忘れていたことだ。

この旅に出るにあたって、

わたしは当時在住だった富山からまずは羽田に降り立って、前泊する予定の成田に移動する前に、

在京の友人たちと久しぶりに会って飲んだり食べたりする約束をしていて、

羽田から都内に向かう京急線に乗った。

そして、その車内で、

旧い知り合いと偶然ばったり会っていた。

電車の向かいに、かっちりしたスーツを着て、二宮金次郎みたいなきちんとした姿勢で、しかし少年ジャンプを読んでいる男性がいて、それが偶然わたしの旧い知り合いだったのだ。

「あ！」

とわたしが声をあげて、その人がマンガから視線をあげてわたしのほうを見て、やはり、「あ！」という表情をしたのは覚えている。

そして、そのとき、なぜここにいるのか説明した、いきがかり上、

イタリアにいくんだけどドイツで乗り換えで、ドイツの空港のことがよくわからなくて、と、たまたま話題にしている、

海外出張慣れしているその知り合いが、

おおまかにフランクフルトでの乗り換えについて教えてくれたという記憶がある。

そしてその旧い知り合いとは、それっきり再会することも、連絡をとりあうこともないままだ。

その知人に聞いたアドバイスが役にたったのか、あるいはまったく役にたつことはなかったのか、そのアドバイスの内容そのものが、

ハルキムラカミがなにかで書いていて妙に記憶に残っているのだが、「記憶の辺土（リンボ）」あたりへ追いやられてしまっている。

旅の記憶をあたためておいてあとから書き綴りたいというのは、

旅人が持つ共通する夢だろうが、

そう、こんなふうにはたやすく失われるのだ。

覚えているのは、いくつかのカウンターでなにかを尋ねるも、

英語が通じないのか、自分の英語が誰にも理解されないのか、

返事は（たぶん）ドイツ語（なのか、ドイツ語ふうになまっている英語なのかも判断できない）

みたいに聞こえる言葉で返ってくるので理解不能だし、

どこへいっても、

どんな案内を見ても、

アリタリア航空のローマ行きのゲートがどこなのか分からず、

時間だけが刻々と過ぎていくという状態の自分の焦りなんだけれど、

結局わたしは、ローマ行きの飛行機に乗られることになったらしくて、

カフェらしき場所で、いかにも外国風ミネラルウォーターのパッケージを写真の中にうつりこませた、

写真を添付した、海外からの初のリアルタイムの旅行記録をアップしている。

（そのときのリアルタイム旅行記は今はこの[電子書籍](#)にまとめられている）



ちなみにそのときドイツからメール送信してアップした写真はこれです。

そして、出発ゲートだと思われる場所にきてからも、誰かにここでいいのかと尋ねた記憶があって、最後までこの飛行機でいいのか首をかしげながら搭乗したのだった。今思い返してみても、ローマ行きと書かれたはっきりした表示をどこかで目にした記憶がない。どうしてあんなにわかりにくかったのか、それとも普通の旅人が難なくこなしていくための、皆が必ずチェックするある重要な項目が存在するのに、それについてわたしだけ無知なのか、冷静で大人びてみえるヨーロッパ人種の行きかうターミナルで、一人焦って右往左往するドタバタ劇めいた自分というのがこの旅の記憶の始まりに存在する。

本書は、
須賀敦子の書物に触発されて旅を続けてきたであろうわたしの、
とりとめのない本と旅に関する雑文を綴っていくものになる予定だ。



須賀敦子が外国語を学ぶということのみにとどまらず、学んだ外国語で学問をしに、あるいはその学問を生かしてその国でものを考えて人とつきあって「生きていく」という夢と希望を持って海を渡ったことを思えば、

須賀が最初のあしがかりとしたはずの外国語を覚えるという目的すらなく、旅の指差し会話本とか電子辞書でなんとか手続きや買物だけはクリアして、海外の珍しい風土を眺めてグルメを満喫して帰ればオッケーだという旅行しかしていないわたしが、須賀敦子と旅について語るかのような本を書いて

てみるというのは、おそろしく図々しいことに思える。

あまり卑屈にならなくても・・・とも思うが、やっぱり少し情けない。

『須賀敦子の〇〇（ここにはローマとかフランスとか須賀にゆかりのある土地の名前がくる）』というタイトルで、何冊も本があって、それぞれ須賀に特別の思い入れのある文筆家たちが、それぞれ須賀ゆかりの土地を訪ねて随想を連ねつつ、その土地の美しい写真をちりばめ、また、須賀の素晴らしい文章や、須賀の訳したサバの詩などもちりばめられた贅沢な本たちで、須賀の死後はそのシリーズが出る度に楽しみに読んでいた。



そのシリーズの中でも特に好きな『須賀敦子のトリエステと記憶の町』（岡本太郎、河出書房新社）

そもそも、そのシリーズの一冊を書ける人というのは、やはり、それなりに外国や外国語、文学などに造詣の深い、専門性を持った人間でなくてはならないのだろうと、それらの筆者たちをおもいうかべる。

これは単なる素人のわたしが商業目的ではなく、趣味の範疇で出版する電子書籍だから、なにを書いても自由で、さらにレベルが問われるわけでもない。ただ、素人なりのプライドで、ひたすら恥ずかしいと思うのみだ。

しかし。

それでも書きたいなにかがあり、また、須賀に関するものなら何でも読んでみたいというファンはたくさんいるから、だから書くのだという理由で、書き進めるしかない。

須賀の代表作もまた『ミラノ霧の風景』『ベネツィアの宿』『トリエステの坂道』と、イタリアで須賀とつながりの強い都市の名前がそのままタイトルに使われている。

ミラノは須賀がイタリアで暮らした本拠地だし、ベネツィアも北イタリアで、ミラノと並ぶ大都市であり、また語るべきことの多い文化の豊かな土地だ。そしてトリエステ。これは須賀の夫ペッピーノの愛した、そして須賀じしんも愛することになるイタリアの詩人、ウンベルト・サバの出身地である。

須賀は、ヨーロッパには旅行者としてでなく、イタリア人と結婚してイタリアで働き、生活者として滞在した。

しかしながら、残されたエッセイを読むと、旅人の書いた紀行文めいた印象がずっと通底してある。

しょせん、日本人なのだから旅行者のように暮らすしかなかったのかといえばそんなことはなくて、須賀は夫の駐在についていった妻というような日本人とは明らかに一線を画す、真にイタリア人と心の交流をはかって生きていた人だということがエッセイからは読み取れる。（真に交流をはかるってことがどんなことを指すのかとかはまたおいといて。駐在妻が真の交流をはかってないかといえばまた偏見になりそうだし・・・すみませぬ。汗）

それでも、須賀の視線、視点が、ずっと旅行者のようだから、一種、エッセイが紀行文めいたものになったということだろう。

旅行者のようだというのが、どんなことを指すのか、今ここで説明するのは難しいし、わたしもよく分かっていない。

でも、須賀から感じられる旅行者のような視点と語り口・・・、須賀の魅力的な文章がどうしてこんなに魅力的なのかを、探るためにまた自分も、とりあえず旅行を試してみる、というのが、わたしの旅行に与えられているかもしれない、というか自分で無意識に課してきた、わたしの旅の目的なのだと思う。

わたしはよく旅行記を書くが、旅行記を書きたいから書いているというより、須賀のような文章が書きたくて、

どうしたら書けるのか試行錯誤してるうちに旅行記をよく書くようになった気がしている。

そしてまた須賀と旅行の記憶についてなにか文章を書くということをはじめたが、

やはりこれも結局、須賀の書くものに憧れるあまりに、

こういうものを書いてなんとか近づけたらということなのだろう。



「ヴェネト地方の冷えた白ワインにぴったりの、塩味のきいた小さなエビの前菜や、ほんのりと海の香のするカニのリゾットのあいだを縫ってはてしなくつづく会話が、まもなく選考のはじまる今年の主要な文学賞の候補作品におよぶと、それまでのあたりさわりのない外交辞令はあつという間に見棄てられ、それぞれがテーブルに身をのりだしての大論争になった」

・・・抜書きしたのは、須賀敦子の『ヴェネツィアの宿』におさめられた表題作の一節で、文章として表現された旅で（わたしの読書の範囲がカバーする限り

において、なのだけれど、当然）、須賀の、ヴェネツィアへの、文学のシンポジウム出席のための慌ただしくも美しいこの旅ほど憧れるものは今のところ存在しない。

とはいえ須賀のこの旅は、そんな優雅なものではない。それほど予算がふんだんにあるとは思えないイタリアの文学に関するシンポジウムから招待されての旅であるから、格段にリッチな旅行ではなかったはずだし、時間に追われて、また文学談義に必死なあまり、せっかくの冷えたワインもシーフードもそれほど味わう余裕もなかったかもしれない。そのうえ須賀は、ひどく体調不良を抱えて、ディナーを終わりに近い時間とはいえ、中座するくらいなのだった。体調が悪くてホテルに直帰するにしても、ここはヴェネツィア。そう、どんな金持ちも車で移動はできない町なのだ。タクシーといえ、陸上を走る車ではなくて水上の方を指す町だ。

ただでさえ迷子になりやすい町の夜、須賀はうまくホテルに辿りつけるのかおぼつかない気持で歩いている。

そしてこのあとでてくる、空色とレモン色の、手作りかと思われる素朴なネオンの描写が印象的で、そして、

そのネオンをくぐったあたりから、

この旅の、いや、このエッセイの本物のクライマックスが始まると言えるのかもしれない。

その旅の目的地がなんでNYになったのかそもそもまったく記憶にないのだが、

高校時代からの「悪友」Yと初めての海外旅行をすることになり、我々はシカゴ・オヘア空港に着陸したところだった。

NYに行くのなら、同じ東海岸のワシントンDCに、悪友Yと一緒に出席した共通する友達の結婚式で知り合った女性が棲んでいるので訪ねよう、ということになったのか、そもそもその女性がワ

シントンにいたので頼りにして訪ねる話が最初にもちあがってそれならばせっかくだからNYにもという話になったのだろうか。

ともかくその旅行の話がもちあがったと思われるとき、Yと一緒にいるときは高校卒業後ずっとそうだったのだが、ひどく酩酊していたので話の筋が思い出せない。赤ワインのボトルが何本も乱立し、部屋で女ばかりが何人も集まって飲んだのに手作りの料理のひとつもなく、コンビニで買ったアタリメなどが雑然と並ぶ誰かのアパートの画像は脳に焼き付いているが、普段から仲良くして集まったメンバーのうち、なぜわたしとYだけが旅行することになってほかのメンバーはその話に乗らなかったのか、などなど、今思い返すと色々疑問点は湧くのだが、とにかく、あやふやな記憶をいちいち確かめたくても、とってもしゃないけれどおいつかないほど、当時は常に人と会うのは酒の席だった。

後日、Yから、「例のアメリカまでのチケットとっちゃうけど、この値段でいい？」みたいな電話があって、ぼんやりと一緒に旅行しようという話をしたことは覚えているのだが、あ、やっぱりその話夢とかじゃなくて、本当だったのよね、と、鈍い二日酔いみたいなアタマで（比喻ではなくて、やっぱり本当に二日酔いだったような気もする。そのくらいよくお酒を飲んでいて）ぼんやり承諾の返事をしたはずだ。

午前のフライトだったので、出発前日は成田の、彼女の勤務する航空会社の系列ホテルに社員割引で泊まったのだが、その最上階のバーでやはり遅くまで呑んでくれて、せっかくかなり安く泊まれたのに、チェックアウトで支払ったバーでの酒代が宿泊代を軽く上回るような事態になりつつ飛行機にのりこんだという、若気の至りとかそういう言葉でむにゃむにゃごまかしたいような記憶がずっと、ビーズのように連なっているとして、そのビーズを貫く糸が、アルコールでできているようなイメージがするのだった。

一体なぜあの頃、あんなにお酒をよく飲んでいたのでろう。依存症という言葉もちらつく。そののち、Yとわたしは、偶然、同じ年の一ヶ月違いで出産することになって、仲良く禁酒することにもなる。

オヘア空港でそれほどゆっくりする時間はなかったのだが、とりあえずコーヒーを飲んでベンチで休もうと、まずは後先考えないタイプのわたしが目の前にあったマクドナルドでホットコーヒーを頼んだら、それがまさに薄い泥水と形容したくなるシロモノで、なにをするにも慎重派のYはそれを見てから、

もっとマシなコーヒーを探すと、ターミナルの中を歩きまわって、スターバックスでコーヒーを買った。

マックの泥水のようなコーヒーを捨てるのは気がひけるものの、これ以上飲む気もせず、でもスタバで新しいのを買ってまでコーヒが飲みたいわけでもないわたしは、それは12月の中旬くらいのことで、赤いホリデーシーズン用の紙カップに入ったYのコーヒーを恨めしそうに見ていたら、「最初に毒見してよね」

とYが差し出してきたのでありがたく頂戴する。

しかし、そのコーヒーもいつも日本で飲むのと比べてずいぶん薄味だ。

「アメリカンって注文したの？」

「アメリカンもなにもここはアメリカだしね。普通にコーヒーって頼んだらこれだったよ。どれどれ、わ、ほんとに薄い！」

とYも顔をしかめる。

その後、幾度か行ったアメリカのスタバでコーヒーを頼んでみたら、日本と同じように濃いエスプレッソが出てきたので、

シカゴのオヘア空港のみで異様に薄いコーヒーを販売しているのか、

たまたま店員がミスって規格外のコーヒーを作って販売したのかどうか分からないけれど、

二人でこの先、なにもアメリカでコーヒーなどを注文することはなかったと、ますますアルコールを注文することに拍車がかかっていく要因になったのは間違いない。

そして、旅の手配は何から何まで航空会社勤務のYに任せてしまっていて、そのときのフライトは着陸態勢に入ってから、気持ち悪いくらいに幾度も飛行機が急降下するみたいな挙動をみせ、青ざめたのだが、そのときに初めてあれ、ここってシカゴなの？NYでもDCでもないの？と、往路延々と酒を飲んで酩酊していたわたしは、まさにシカゴの上空で隣のYに訪ねた記憶もある。

しかし、これがわたしの、最初で（いまのところ）最後の友人といった海外旅行となっていて、誰かと旅行するより一人旅が好きだとは思うものの、

やはりYと行ったというところが良かったのか、猛烈に楽しかった。

こんな楽しいのならいつも毎回誰かと旅行すればいいのにとと思うくらいなのに、

結局誰かと予定を合わせるのが面倒で、

それから友達と旅行をすることはなかった。